

Title	溶けきらない移民たち : エイブラハム・カーハン『イエクル』における同化・言語・ジェンダー
Author(s)	里内, 克巳
Citation	言語文化研究. 2010, 36, p. 85-102
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7241">https://doi.org/10.18910/7241</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 溶けきらない移民たち

— エイブラハム・カーハン『イエクル』における同化・言語・ジェンダー —

里 内 克 巳

This study is an attempt to unravel social messages in *Yekl: A Tale of the New York Ghetto* (1896), the first English novel by the Jewish writer Abraham Cahan. In opposition to the prevailing ideas of total assimilation, Cahan proposed to view immigrants from the Old World as a heterogeneous “hodgepodge.” The novel’s working-class protagonist changes his name from the Jewish “Yekl” to “Jake” and boasts of having become a real “Yankee.” However, Jake’s failure becomes apparent when we focus on the clumsy way in which he handles the English language as well as his excessive self-consciousness and pre-occupation with being a male. For Jake, acquiring manhood is the shortest and surest way to becoming an American. Ironically enough, such thinking prevents the renewal of his self because it only bolsters the old, patriarchal ways of thinking that had been part of him from his days in Russia. Thus, by recounting Jake’s miserable life with his newly-arrived Jewish wife Gitl, a marriage that ends eventually in divorce, Cahan suggests the impossibility of the assimilation of the Jewish people. Nevertheless, we should remember that the author portrays immigration in a positive light as well by depicting Gitl’s remarriage with a modest Jewish worker who cannot adapt to the gender standards of either Russia or America. Through such endings, Cahan most eloquently expressed his progressive stance in terms of gender and ethnicity.

キーワード：Cahan, 同化主義, ジェンダー

### 1. 移民文学の先駆け

移民文学, ないしは亡命文学と呼ばれるジャンルがある。ある作家が何らかの事情で異国の地に移り住み, 母語を使わずにその地の言葉で作品を執筆する, というものだ。アメリカ文学史における最も有名な例としては, ロシア語を母語としながらも英語で作品を書くようになったVladimir Nabokovを挙げることができる。ナボコフの代表作*Lolita* (1955年)は, その言語表現の豊饒さ・巧みさで知られるところだが, 内容的にも, モータリゼーションの進んだ第二次大戦後のアメリカの風俗を, 外国人の視点から鮮やかに描き出そうとした点で, アメリカ文学のなかで独自の位置を占める。世界における英語の覇権が確立さ

れつつある現代ともなれば、このようなナボコフの申し子とでも呼ぶべきアメリカ在住の若手作家は数多く見出すことができる。例えば、冷戦構造崩壊後の時代を背景に、アメリカ合衆国の存在が世界の辺境の地に落とす影を喜劇的に描いた小説*Absurdistan* (2006年)の著者Gary Shteyngartはロシア出身である。巧みな語りの技巧を駆使して、母国である中国の過去と現在を批判的に見つめようとする*A Thousand Years of Good Prayers* (2005年)のYiyun Liも評価が高い。このように第二言語としての英語を自在に操り、母国を、アメリカを、そして世界を俯瞰する新しい移民文学の書き手は今後も増えていくに違いない。

逆に、このようなアメリカの移民文学の系譜を過去へと辿っていくならば、はたして誰に行きつくのか。この問いに対する答えはひとつとは限らないが、19世紀末から20世紀前半にかけて活躍した作家Abraham Cahanは、その最有力の候補であると言えるだろう。カーハンは、1860年にリトアニアで生まれたユダヤ人である。当時の東ヨーロッパではペイル(Pale)と呼ばれるユダヤ人居住区が広がり、その地をロシア帝国が支配していた。イディッシュ語を母語としていたカーハンは、ロシア語を第二言語として学び、教師として生計を立てるようになった。だが、当時のロシアは政情不安定で、皇帝アレクサンドル二世の暗殺を機としてユダヤ人に対する大規模な弾圧(ポグロム)が起きる。世紀の変わり目に大量のユダヤ人移民がアメリカに流れ込むようになったのは、主としてそうした事情が与っている。皇帝暗殺に関わった嫌疑を受けたカーハンも、難を逃れるためにロシアを離れ、1882年にアメリカに亡命している。

アメリカ移住後のカーハンは、社会主義的な運動に関わりながら、英語で文学作品を発表するようになる。知遇を得たアメリカ文壇の大御所William Dean Howellsの勧めによって、これから論じることになる短い長編小説*Yekl*を1896年に発表し、注目を浴びた。その後も、社会主義系のイディッシュ語新聞*Jewish Daily Forward*の編集に長く携わりながら、主として短編小説を中心としたカーハンの英語作家としての試みが続いていく。1917年には、代表作として知られる小説*The Rise of David Levinsky*が出版された。この大作は、ユダヤ人少年デイヴィッドが、生まれ育った東欧の小村からアメリカに渡り、ニューヨークで行商人として生計を立てることから始めて、次第に衣類製造業の経営者として財を築いていく軌跡を、女性たちとの性的な遍歴も交えながら辿るものである。この小説は、世紀転換期アメリカのユダヤ系移民の生活ぶりを知るためにも有益な、歴史資料としての一面があるため、多文化主義の立場からアメリカ史を見直すRonald Takakiの高名な*A Different Mirror* (1993年)のなかでも詳しく紹介されている。<sup>1)</sup>

分量的にも、作品に描き込まれた人間観察の成熟ぶりという点からも、後年に書かれた『デイヴィッド・レヴィンスキーの向上』が、カーハンの集大成的な小説であることに異論の余地はないだろう。とはいえ出世作の『イェクル』も、負けず劣らず重要な作品であり、これを読まなければカーハンという作家の理解が不十分なものになってしまう恐れが

1) Ronald Takaki, *A Different Mirror* (Boston: Little, Brown, 1993) ch.11 "Between 'Two Endless Days': The Continuous Journey to the Promised Land" pp.277-310を参照。

ある。まず、1917年の長編のタイトルが、明らかにハウエルズの代表長編*The Rise of Silas Lapham* (1885年)を下敷きにしたものであることに、私たちは注目する必要がある。資本主義を強力に推進するアメリカの社会のなかで成功することに伴う精神的な代償という主題を、二つの作品は共通して持っており、アメリカ文壇での力を弱めた後もなおハウエルズがカーハンに与えていた持続的な影響をここに見て取ることができる。二人の作家が最も親しくつきあっていたのは、1890年代の『イエクル』執筆の時期であるので、文学者としてのカーハンを理解するには、まず何を措いても『イエクル』に目を向けなければならない。また、『デイヴィッド・レヴィンスキーの向上』の特に結末部で現れる、ユダヤ人として生きた過去の自分と、同化したアメリカ人として豊かであってもどこか空虚な生を営む現在の自分との断絶という問題は、移民作家カーハンならではの関心事であるが、すでに1896年の長編においてこの主題は、主人公が「ジェイク」(Jake)と「イエクル」(Yekl)という二つの名前を持つという二重人格的な趣向のもとに、より鮮明な形で追求されているのである。

そして更に、小説を作り上げていくための媒体である「ことば」の問題もある。『デイヴィッド・レヴィンスキーの向上』はごくわずかの例外を除いて、滑らかで標準的な英語で書かれている。そのことは、地の文であっても、会話の中の文であっても変わらない。ところが『イエクル』の場合は、後に具体例を見るように、アメリカに移り住んだユダヤ人たちの使う、イディッシュ語——これは概ね、標準的な英語に翻訳される——と訛りのある英語の混じり合った会話文が大々的に使われている。このスタイルはひとつには、Mark Twainに代表されるような、南北戦争後に流行したリアリズム文学ないしは方言文学(dialect literature)の影響下にカーハンが置かれていたため、読みにくいこともあって、英語作家としてのカーハンは後にこの手法を採用しなくなる。しかしながら、このような言語的実験性こそが、『イエクル』を興味深いテキストにしているという逆の見方もできるのであって、その意味では、多重言語者としての作家カーハンの本領は後年の大作よりもむしろ、一読して荒削りな感触を与える初期の『イエクル』でこそ発揮されているのである。本稿では、徐々に再評価の光が当てられつつあるこの小説に焦点を絞り、その「移民文学」としての豊かさの在り所を探ってみたい。<sup>2)</sup>

## 2. 室内と戸外——二つの「群衆」

19世紀末にニューヨークのLower East Sideに住みつくようになったユダヤ移民たちの多くが、搾取工場(sweatshop)で既製服産業に従事したことは、広く知られる歴史的事実

2) 多言語テキストとしてのYeklに光を当てる最近の重要な試みとしては、まず、Hana Wirth-Nesher, *Call It English: The Languages of Jewish American Literature* (Princeton University Press) の第2章 “‘I like to shpeak plain, shee? Dot’sh a kin’ a man I am!’: Speech, Dialect, and Realism: Abraham Cahan” pp.32-51. が挙げられる。また、Werner Sollors, ed. *Multilingual America: Transnationalism, Ethnicity, and the Languages of American Literature* (A Longfellow Institute Book: New York University Press) では、Part III “Yekl and Hyde: Different Language Versions of the ‘Same’ Text” という項目が立てられ、Avita Taubenfeldの論考 “Only an ‘L’: Linguistic Borders and the Immigrant Author in Abraham Cahan’s *Yekl* and *Yankel der Yankee*” が収められている(pp.144-65)。

である。この地域に住む多様な貧民の姿を写真と文章で紹介したJacob A. Riisの*How the Other Half Lives* (1890年)は、当時の移民の暮らしぶりを知る上で欠かせない文献であり、ユダヤ人街についても二つの章が設けられている(10章と11章)。ここでリースは、ユダヤ人移民の陥った皮肉な状況に焦点を当てる。すなわち、ユダヤ人たちはロシアやポーランドでの専制政治(despotism)から逃れるためにアメリカへと渡ったにも拘わらず、新天地においても低賃金・長時間の労働への従事を余儀なくされることで、旧世界でのそれと実質的に変わらない専制に支配されていく。更に皮肉なことに、「親方」に酷使される身分であったユダヤ人労働者は、やがて自ら親方になり働き手を抑圧する側にまわることで、専制的な制度を強化してしまう。ユダヤ移民の陥ったそのような二重の悪循環を、リースは一定の共感を込めて説明している。<sup>3)</sup> だが、そこで描き出されるユダヤ人像は、あくまでも「犠牲者」としての役割に留まるものであり、一步間違えばステレオタイプに墮しかねない危うさを孕んでもいる。ユダヤ人たちは独自の顔を持たない没個性的な集団として提示され、生活の資を得る営み以外の人間らしい側面を、リースの文章からすくい上げることは難しい。

さて、『イェクル』は非常に長いパラグラフで始まるが、ここでカーハンは、リースの著作のように硬直した、半ば紋切り型になってしまった見方とは全く異なるユダヤ人労働者の姿を一気に示してみせている。<sup>4)</sup> 場面は外套を作る小さな作業場(“cloak shop”)であることから、これら働き手がユダヤ人であることは読み手に直ちに了解される。だが彼らは過酷な労働に喘いでいるのではなく、仕事を取りに出かけている親方が帰ってくるのを、のんびりと自分なりのやり方で待っているのである。<sup>5)</sup> ラビのような風貌をした男性が、辞書をかたわらに英語の新聞を読んでいる。(物語が進むにつれて、この男が主人公ジェイクの友人でもありライヴァルでもあるBernsteinであると分かってくる。)二人の若者がユダヤ演劇の主演俳優の話をしている。痩せた男がタルムードを唱えながらイディッシュ語で書かれた社会主義系の雑誌を読んでいる。次いで自分のコートを繕っている赤い頬髭の中年男や、女性作業員たちの姿が軽く書き込まれた後、主人公であるジェイクが得意げにニューヨークとボストンの違いについて長広舌をふるう様子がパラグラフの最後に置かれることになる(1)。<sup>6)</sup>

この冒頭部に描かれたユダヤ人労働者の群像には、抑圧・被抑圧といった定型から逸脱していること以外にも、各人が独自の個性を持った集団である、という特徴がある。改行

3) Jacob A. Riis, *How the Other Half Lives: Studies among the Tenement Life in New York*. (1890. New York: St. Martin's, 1996). pp.138-48.

4) Riisの著作と*Yekl*とを比較する類似の研究として、Cahanの作品を同時代に流行したボードヴィル演劇との繋がりから探ろうとするMerle L. Bachman, *Recovering "Yiddishland": Threshold Moments in American Literature* (Syracuse, NY: Syracuse University Press, 2008)における解釈がある。pp.53-58参照。

5) 親方のいない間に労働者たちが無駄話で長々と時間を費やす設定は、*Yekl*に先立って1895年に雑誌掲載された短編“A Sweatshop Romance”(1898年の短編集*The Imported Bridegroom and Other Stories*に所収)にも見られる。

6) 本稿におけるテキストは、Abraham Cahan, *Yekl and The Imported Bridegroom and Other Stories of Yiddish New York* (New York: Dover Publications, 1970)を使用する。本文の括弧内の数字はすべてこのDover版に拠るものである。

なしに一つのパラグラフに押し込められた働き手たちは、いわば「かたまり」として捉えられているわけだが、それにも拘わらず彼らの間には、今現在住んでいるアメリカという地への関与の仕方に明らかな温度差が認められる。バーンシュタインのように、ユダヤ的な慣習を捨てることはしないが、苦勞しながら英語を読むことを通してアメリカでの生活に適応していこうとする者がいる。また一方、名前を与えられない痩せた男のように、母語であるイディッシュ語にあくまで執着し、アメリカの経済システムに背を向ける態度をとる者もいる。そして、パラグラフの最後に登場するジェイクは、読み進めていくにつれて、あらゆる点で、過去を振り捨ててアメリカ人へと変身を遂げようとする人物であることが分かってくる。同化を志向する者、しない者が入り混じり、そして同化の度合いも様々であるというのが、このユダヤ人の労働者集団の実態なのである。

まとまりのある集団として捉えられながらも、決して一枚岩的に描かれることのないこの室内での働き手たちの描写は、興味深いことに、次章“The New York Ghetto”におけるロウアーイーストサイドを行き交う人々の描写へと引き継がれていく。ここではまず、作業場での仕事を終えて、Suffork Streetにあるダンス教室に向かう主人公ジェイクの目を通して、場末の街の情景が以下のように描かれる。“He had to pick and nudge his way through dense swarms of bedraggled half-naked humanity; past garbage barrels rearing their overflowing contents in sickening piles, and lining the streets in malicious suggestions of rows of trees; underneath tiers and tiers of fire escapes, barricaded and festooned mattresses, pillows, and featherbeds not yet gathered for the night.” (13. 下線は引用者による) ゴミがうず高く積み重ねられている樽。様々な洗濯物のかけられた避難梯子。そしてとりわけ下線で示したように、薄汚れ、半裸の、密集した人間の群れ。これらは*How the Other Half Lives*の読者ならお馴染みの、ロウアーイーストサイドの光景であり、見分けのつかない「他者」として捉えられた群衆の姿である。

ところが次の段落に入ると語り手は、ジェイクの視点を借り受けずに、ユダヤ人の避難所としてのニューヨークについて滔々と語り始める。小説冒頭部と呼応させるかのように、このパラグラフも1ページを超える長大なものになっており、先ほどの小さな労働者集団と同じく、ここで開示される世界中に広がるユダヤ人の生も、一括りにすることを拒む多様性に満ちている。アメリカにやってくるこれらの人々の出身地が、ロシア、ポーランド、ハンガリー、ルーマニアと多岐にわたるのはもちろんのこと、アメリカに来てからの境遇も、ただ単に貧者が富者へと再生する場合もあれば、逆に富める者が貧しさのどん底に突き落とされる場合もある。そのような双方向の境遇の変化を盛り込んだ文章を、貧と富、善と悪、知と無知という対立軸に沿って三つ並べた後、ニューヨークで目にする群衆が要するにどんな人々であるのか、という総括を語り手は行って段落の結びとする。

[...] —in fine, people with all sorts of antecedents, tastes, habits, inclinations, and speaking

all sorts of subdialects of the same jargon, thrown pell-mell into one social caldron—a human hodgepodge with its component parts changed but not yet fused into one homogeneous whole.

(14)

1908年に、ユダヤ人作家Israel Zangwillの*The Melting Pot*がワシントンで上演されて以来、「人種のるつぼ」というメタファーが、アメリカ社会を形容するメタファーとして一般に浸透していったのは周知の事実である。様々な出自や性向を持ったユダヤ移民たちがアメリカ社会という「大釜」(caldron)に投げ込まれて変容していくという引用部の表現は、一見するとザングウィルの「るつぼ」のモデルを先取りしているかのようだ。だが、そこには決定的な違いもある。「大釜」に入れられた移民たちは、部分的には変化しても、溶けきって均一に混じり合うことは決してない。過去の自分と決別して、新たな人間として生まれ変わる移民、という同化主義的な図式を語り手は拒絶している。彼らは群衆としてひとまとめに捉えられてはいるが、均一性を持った集まりとしてではなく、あくまでも錯綜した「ごたまぜ」(hodgepodge)として存在しているのである。以上のように、室内と戸外という二つの「群衆」描写を検討してみると、アメリカにやってくる移民は過去を振り捨てるどころか、むしろ過去の残滓を抱えながら、新しい生活を営んでいくものなのだ、という作者カーハンの認識を読み取ることができるだろう。そして、こうした旧世界での体験と新世界での新たな生活との連続性をあらかじめ押さえておくならば、主人公「ジェイク」がロシアでの「イェクル」としての過去を断ち切り、ひたすら「ヤンキー」であろうとする試みの愚かさが、より鮮明に見えてくる。

### 3. アメリカ化と「男らしさ」

物語の主人公であるYekl Podkownikは、ロシアの北西部にあるPovodyeという小村で、敬虔なユダヤ教徒であり鍛冶屋として生計を立てる父親とその妻との間に生まれた。両親に大切に育てられて22年の歳月を送った後、イェクルは妻Gitlと生まれてわずか半年の息子Yosseléに別れを告げて、生活の資を得るために単身アメリカに渡る。ところがボストンで、次いでニューヨークで暮らすうちに、ユダヤ教の安息日である土曜日には働かない、といった過去の戒律を彼は次第に破るようになっていく。物語の主筋は、アメリカに暮らすようになって3年後のイェクルの行動を追っていくのだが、この頃になると彼はロシアでユダヤ人として暮らした過去を完全に否定して、名前を「ジェイク」とアメリカ風に変えてしまっている。過去の自分に対しては、憐れみと蔑みの混じったような思い(“patronizing commiseration for his former self” 12)を抱くばかりである。ユダヤ人に特徴的な口髭も剃り落としたジェイクは、すっかり「ヤンキー」になった自分を他の働き手に誇示している。<sup>7)</sup>

7) Joan Micklin Silverが監督した映画*Hester Street* (1975年)は、Yeklのストーリーをほぼ忠実に映画化したもので、Cahan再評価のきっかけを与えたことで知られるが、映画の中のJakeが口髭をつけたままで登場するなど、原作の持つ同化主義に対するアイロニカルな姿勢が曖昧化されている。また本節で分析するような、原作の持ち味となっている凝った言葉遊びの趣向が、安易な映像化を拒むものであることは言うまでもない。

しかし、そのようなジェイクのアメリカ人への同化は完全なものではない。彼がアメリカ化した自分を自慢すればするほど、本来の無骨な素地が露わになり、読み手が滑稽感を感じる時がある。そればかりかジェイクの変身志向には、彼自身にも十分に意識されていない独特のバイアスがかかっているようである。そこで本節では、作品中最も密度が高いと思われる冒頭の作業場での会話およびそれに続くダンス教室の場面に焦点を定め、ジェイクの「ヤンキー化」の内実へと測鉛を下ろしてみたい。

ジェイクの自慢話の特徴は、まず何よりも男っぽさを前面に出すような話題を彼が好んで取り上げることにある。ボストンにいた頃は、ボクサー John Sullivan の友人だったキリスト教徒と仲良くしていた、というのがジェイクの自慢の種である。そこから話は展開していき、別のボクサー James Corbett がヘビー級王座防衛戦でサリヴァンを打ち負かし、次いでイギリスのボクサー Charley Mitchell も倒したことにジェイクは触れ、事情通であることを披露する(2)。これらの選手はすべて実在した選手であり、言及されている試合も、それぞれ1892年と1894年に行われた歴史的事実である。このような素材の取り込み方は、1896年発表のこの作品には、書かれた時点での「現在」を取り込む風俗小説としての側面があることを雄弁に物語っている。ともあれ、後で持ち出される野球の話題(5-6)と共に、アメリカの国技として人気のあるスポーツへの関心を示すことで、ジェイクは自分の「ヤンキー度」の高さを証立てようとする。別に言うなら、ジェイクにとって「アメリカ人らしさ」とは、何よりも男性だけが行うスポーツに体现されるものなのである。

ただし、アメリカ人の国民性と男性性が等号で結ばれるとしても、肉体的な力の行使へと無節操に走ることをジェイクが称揚しているわけではない。アメリカのボクサーとロシアの農民(moujik)とが闘ったとき、どちらが勝つかという議論へと話が流れると、ジェイクはこう言い放つ。“Do you mean to tell me that a moujik understands how to *fight*? A disease he does! He only knows how to strike like a bear [Jake adapted his voice and gesticulation to the idea of clumsiness], *an' dot'sh ull!* What does he care where his paw will strike land, so he strikes. But here one must observe *rulesh* [rules].” (3-4) 喧嘩をするにしても、きちんとした「ルール」に則っているアメリカ人の方が、そうでない無手勝流のロシア人よりも強いのだとジェイクは主張している。身体的な暴力性のみならず、それを一定の規則によって律する態度こそが、ジェイクの考える「男らしさ」＝「アメリカ人らしさ」の中核を成している。何か事があるたびにポケットからコインを取り出し、論敵に賭けを挑もうとする癖がジェイクにあるのも(6; 18)、おそらくは、偽った言動をしてはならないという倫理的な規範に則るポーズを示せば自分はヤンキーらしくなれるのだ、という思いに彼が過剰にとらわれているからだ。

そうした「男らしさ」への並々ならないこだわりの結果、引用部が示すように、そこから逸脱してしまう者はアメリカ人の範疇に入らないだけでなく、もはや人間ならざる「熊(bear)」に等しい存在なのだという思いすらジェイクは抱いている。しばしば彼は、口論

の際には、「熊」や「猿」といった動物を引き合いに出して相手の非アメリカ性ないしはユダヤ性をからかう。例えば第2章における、ポーランド出身のユダヤ人女性Mamie Feinとの会話は、お互いを猿呼ばわりする (“An’ you are a monkey from monkeyland”; “You are a monkey you’self” 19) 軽口の応酬が印象的であるが、そのなかでジェイクはこんな虚勢を張っている。“By gum, Jaw! Vot you take me for? Ven I shay I ashk, I ashk. You know I don’t like no monkey beeshnesh. Ven I promish anytink I do it shquare, dot’sh a kin’ a man I am!” (18. 下線部は引用者による) 下線を引いた「モンキー・ビジネス(monkey business)」とは、「ごまかし」「いんちき」という意味の口語英語である。ジェイクにとって偽りをしないことは、立派な男性になるための、ひいてはアメリカ人になるための条件であることが、ここでは表明されている。だが、彼の言葉のさらに背後に横たわっているのは、その前提条件から逸脱することは文字通り「猿」のレベルに墮ちていくことだ、という内的論理なのである。「俺はそんな男なんだ!」“Dot’sh a’ kin’ a man I am !” は、作品全体にわたってジェイクが何度も繰り返す決め台詞であるが、彼の使う“man”という語の指し示す「男性」という意味あいには、過剰に引き伸ばされて「人間」へと広げられていく気配がある。

しかしながら、そのような「男らしさ」を振りかざすジェイクの言葉には、ある方向から押すと崩れてしまうような脆弱さが内蔵されてもいる。アメリカのボクサーとロシアの農民の喧嘩をめぐる先述の引用に立ち返ってみるならば、末尾に置かれた“rules”という語は、ここでは特別に“rulesh”と表記されている。イディッシュ語話者が英語の単語を使う場合にはそれを斜体で表示する、というのがこの小説の約束事だが(2)、ここで作者カーハンは、「規則(rule)」にこだわるジェイクが自ら言葉の「規則」を破ってしまう可笑しさに、さりげなく読み手の注意を向けようとしている。だめを押すかのように、このジェイクの言葉の直後に、ライヴアルであるバーンシュタインの次のような台詞を作者は置く。

“Can’t you see?” he [=Bernstein] interposed, with an air of assumed gravity as he turned to Jake’s opponent, “America is an educated country, so they won’t even break bones without grammar. They tear each other’s sides according to ‘right and left,\*’ you know.” This was the thrust at Jake’s right-hander’s and left-hander’s, which had interfered with Bernstein’s reading. “Nevertheless,” the latter proceeded, when the outburst of laughter which greeted his witticism had subsided, “I do think that a burly Russian peasant would, without a bit of grammar, crunch the bones of Corbett himself; and he would not charge him a cent for it, either.” (4)

このバーンシュタインの言葉においては、“right and left”という表現が効果的に使われている。これはまず、ボクシングのパンチが左から繰り出されるのか、右から出されるのか、という話題をジェイクが得意げに話していたこと(2)への婉曲的な皮肉である。作者

はこの箇所には星印と脚注を入れて、“right and left”は、英語で「s」の文字に相当するヘブライ文字に印を打つ位置が左か右かで、発音が変わってくることに関わるものだ、というヒントを与えている(4)。これによってスポーツの「規則」(rule)は、言語の「文法」(grammar)とほぼ等価な位置づけを与えられることになる。ジェイクが学識のあるユダヤ人の中で使われているヘブライ語を読み書きするための「文法」を知らず、かといって英語を自在に操ることもままならないのに、ただひたすらスポーツの規則だけに通じていても、本当の意味でアメリカ人になったとは言えないのだ、とバーンシュタインは言おうとしているのである。

ユダヤ人労働者たちの無駄話の場面では、「男らしさ」をめぐるジェンダーの規範は、(英語にせよヘブライ語にせよ)言語的な規範へと容易に変換できるものとして扱われている。そして後者の規範にジェイクが則ることができないことを暴露することによって、当人の思い込みとは裏腹に、ジェイクがアメリカ人に成り損ねている可能性を、作者はほのめかそうとする。そしてほぼ同様のことは、ジェイクが足繁く通うダンス教室での場面に関しても言えるのである。興味深いことに、「教授」(Professor) Joe Peltnerの主催するこの教室は、「アカデミー」(academy)と呼ばれている。本来的な教育機関ではないダンス教室にかくも大げさな名前が与えられていることの滑稽さはとりあえず措き、二つの点でこのダンス教室は、文字通り「学校」としての機能を果たしていることに私たちは留意する必要がある。第一に、この教室で指導が行われる際には英語が使われる。テネメント(下層アパートメント)の一階を借りて行われるこの教室には、作業着姿のユダヤ系移民労働者たちが生徒として集まってくるのだが、イディッシュ語を母語とする彼らはダンスと共に、アメリカで話される英語も同時に学んでいることになる。第二に、ダンスを学ぶことはこれぞと思う異性をうまく見つけることであり、男性の場合、女性のパートナーを楽しませかつは性的な満足を与えることにすら通じる、というメッセージがこの場面には見え隠れしている。労働者たちの無駄話の場面と同じように、言語の主題とジェンダーの主題は、やはりここでも貼り合わされている。例えばペルトナー教授は、生徒たちを男女別に左右の列に振り分けた後(“Zents to de right an’ lades to the left!” 17)、異性の相手を見つけるようにと指示するが、ここには先述した「左か右か」の残響が聞き取れる。言語と性という二重のレベルにおいて、移民がアメリカ人らしくなることを学ぶ学校としての位置づけが、このダンス教室には潜在的に与えられているのである。

しかしながら、ユダヤ移民の同化を隠れた目的とするこのダンス教室の試みは、失敗に終わる可能性を多分に孕んでいる。そもそも教師であるペルトナー教授の使う英語は訛りがひどく、出自がユダヤ人であることが読み手には一目瞭然である。彼のことをジェイクは二度にわたってファースト・ネームで呼びかけるが、どちらの場合も表記は“Joe”ではなく“Jaw”になっている(18; 19)。これは、ジェイクの訛りを際立たせるための視覚上の工夫ではあるが、綴りを意図的に歪めることによって、この教師が「ユダヤ人」“Jew”

であることを作者は読み手に念押ししているように思われる。いかに教師然として振る舞おうとも、「熊」のように太くて短い脚(15)が、ジョー・ペルトナーの中に残るロシア性・ユダヤ性をどうしてもなく暴露してしまうことを、語り手は暗示している。

ただし、このダンス教室でコーチに近い役割を果たしているジェイクに限って考えるならば、彼の話す英語はペルトナー教授と同じくらいお粗末なものではあっても、女性とうまく踊る能力を持ち、色男ぶりを発揮するその手腕において、彼は教授よりもずっと上手に「アメリカ人」に成りおおせているという見方もできるのである。例えば、教授の依頼を受けて、男女のペアになって踊る生徒たちをジェイクが指導する場面を眺めてみよう。

“Don’ bee ’fraid. Gu rigt aheat an’ getch you partner!” Jake went on yelling right and left. “Don’ be ’shamed, Mish Cohen. Dansh mit dot gentlemarn!” he said, as he unceremoniously encircled Miss Cohen’s waist with “dot gentlemarn’s” arm. “Cholly! vot’s de madder mitch you ? You do hop like a Cossack, as true as I am a Jew,” he added, indulging in a momentary lapse into Yiddish. English was the official language of the academy, where it was broken and mispronounced in as many different ways as there were Yiddish dialects represented in that institution. “Dot’sh de vay, look!” With which Jake seized from Charley a lanky fourteen-year-old Miss Jacobs, and proceeded to set an example of correct waltzing, much to the unconcealed delight of the girl, who let her head rest on his breast with an air of reverential gratitude and bliss, and to the embarrassment of her cavalier, who looked at the evolutions of Jake’s feet without seeing. (17-18. 下線は引用者による)

この場面でジェイクは、チャーリーという生徒の洗練されない踊り方に不満をあらわにし、自ら手本を示すため、パートナーであるミス・ジェイコブズを彼からさっと奪って踊り始める。ジェイクの英語はイディッシュ訛りがひどく、感情が激高したために途中から完全にイディッシュ語に切り替わるが、彼のワルツの腕前の方は相当なものであって、ミス・ジェイコブズを大いに歓喜させ、チャーリーの自尊心を台無しにしてしまう。下線をつけた“Cholly! vot’s de madder mitch you ?”は、標準的な英語に直せば“Charley! What’s the matter with you?”となるが、作者カーハンはこんな風に言葉を意図的に崩すことで、先述のボクシングの話題へと読み手の記憶を呼び戻そうとしている。ダンスの下手な(ひいては女あしらいの悪い)チャーリーという生徒は、アメリカのボクサー、ジェイムズ・コーベットに打ち負かされるイギリス人の「チャーリー・ミッチェル」——ジェイクの発音に倣えば“Cholly Meetchel”(2)——と重なり合ってゆく。ダンスの腕前を披露することで男ぶりを遺憾なく発揮するジェイクは確かに「ヤンキー」に相応しい(と彼が考える)男性性を備えている。そんな見方を、少なくともこの段階では小説のレトリックも支えていることになる。

#### 4. ジェンダーの逆説

ユダヤ人移民がロシアでの過去を振り捨て、アメリカ人という完全に新しい人間として生まれ変わる。そんな同化主義的な考えに染まったジェイクという人物が、最初から皮肉なタッチで描かれていることは確かである。とはいえ小説の序盤においては、「ヤンキー」としての外観を取り繕うジェイクの試みの滑稽さは、ある程度は抑えられている。それは前節で指摘したように、「アメリカ化」の前提条件であると彼の考える「男らしさ」が、それなりにさまになっているからに他ならない。ダンス教室の場面の最後で描かれるのは、先述したポーランド出身の気丈なマミー・ファイン、そして作業場の同僚である Fanny Scutelsky という二人の若いユダヤ人女性をダンスでたっぷりと楽しませた後、相反目する二人に両側から抱きつかれながら立ち去るジェイクの姿である(23)。この色男ぶりに接するならば、彼の「ヤンキー化」の試みは、それがどれほど自己欺瞞に満ちたものであろうとも、それなりに成功していると言わざるを得ない。

ところが、ロシアに残してきた父親が急死し、妻のギトルと息子ヨッセレが彼を頼って渡航してくると事態は急変する。これを契機として、アメリカ人としてのジェイクの自己は無惨な綻びを見せるようになっていくのである。先述のダンス教室の場面で確認したように、ジェイクの内面においてはユダヤ移民のアメリカ化と、不特定多数の異性と上手につきあう才覚とが等号で結ばれている。この論理があるからこそ、「ヤンキー」であることにこだわるジェイクはさも独身男であるかのように振る舞い、自分が既にロシアで妻を娶り、子どもこしらえていることを周囲の者にひた隠しにしてきたのである。妻子を迎えにエリス島に赴いたジェイクは、髪を隠しユダヤ風の服装をしたギトルを目にし、その「無骨でアメリカ人にあるまじき外見」“uncouth and un-American appearance” や、「インディアン女」“squaw” のような容貌に深い嫌悪の念を抱く(34)。「ヤンキー」になった幻想に遊んでいた彼を待ち構えていたのは、主流のアメリカ人とはかけ離れた風貌や慣習を持った女性と結婚しているという厳然たる事実である。こうして始まった家庭生活には、常にぎこちない雰囲気が漂い、ジェイクは抑えきれない苛立ちを異国から来たばかりの配偶者にぶつけていくことになる。そんな物語中盤の展開が新たに開示する、小説に内在した同化とジェンダーの論理を本節では追っていきたい。

妻ギトルに対するジェイクの態度には、滑稽さと醜悪さが同居している。自分がイェクルからジェイクという名前へと乗り換えたように、彼は息子ヨッセレの名をJoeyとアメリカ風に直し、妻のこともGoitie(Gertie)と呼ぶ。これは「非ユダヤ人」“Gentile”をイディッシュ風に読んだときの音に合わせての命名である(41)。同じテネメントに住む面倒見の良いKavarsky夫人の説得に応じて、気の進まないギトルのための西洋風の帽子やコルセットも買っている(39)。妻がユダヤ人であることを止め、アメリカ人へと同化していくことを願う一面がジェイクには確かにある。れっきとしたアメリカ人女性と結婚している方が、「ヤンキー」を自任する自分の世間体もかろうじて守られるからだ。だが一方、アメリカ

人への同化のプロセスがそれほど速やかに進むものではないことも、彼は薄々気づいている。無理をして西洋風の服装をしたギトルに、ジェイクはかえって違和感を抱く。乗り越えることがより困難な「ことば」というハードルに関しては、彼はより酷薄な態度を示す。例えば、窓(window)を指してイディッシュ語で“fentzter”と思わず言ってしまったギトルを、ジェイクはこう言って叱りつける。“Can’t you say *veenda*?” he had growled. “What a peasant head! Other *greenhornsh* learn to speak American *shtyle* very fast; and she—one might tell her the same word eighty thousand times, and it is *nu used*.” (41) ここでは、“window”が“veenda”と書かれることによって、教える側のジェイクの英語の拙劣さが逆に露わになっている。斜体で表示されている英単語はことごとく、ジェイクの英語「スタイル」(style)の不完全さを強調するべく作者によって意図的に選択されている。新しい生活に馴染めない「未熟者」(greenhorn)とギトルをなじるジェイク自身が未熟者であり、いくら学習を重ねても「無駄」(no use)に終わってしまっているという矛盾を、この場面は読み手に強く印象づけるのである。

このように、ジェイクが妻に対して高圧的な態度を示すに至る物語中盤から振り返ってみるならば、「ヤンキー」に変身したと思いついでいるこの男には、母国ロシアで過ごした「イエクル」としての自己が思いのほか残されていたことが見えてくる。ジェイクのギトルに対する態度は、故国にいる老父が急死したとの報を彼が受けた際、目の前に現実であるかのように浮かび上がったヴィジョンを私たちに思い起こさせる。そこには、ロウソクの光に照らされながら敬虔に安息日の儀式を執り行う父親の姿があり、またその傍らで、疲労で体を火照らせながらも眠くなった目を無理に開き、敬虔な仕草で夫の祈りに合わせて唱和しようとしている母親の姿がある(30)。研究者のMatthew Frye Jacobsonはこの場面に着目して、“one of Yekl’s rare moments of clarity, a momentary resolution to reform and fulfill his obligations to Gitl, was attended by Old World memories of ‘the Hebrew words of the Sanctification of the Sabbath’ and a homely vision of ‘a plate of reeking *tzimes* [a sweet dish made of carrots].”と指摘している。<sup>8)</sup> ジェイコブソンの主張するようにこの幻視は、同化主義に目のくらんだジェイクが過去の「イエクル」としての自己に立ち返っていく数少ない瞬間のひとつではある。しかしながらこの啓示的な場面は、「ジェイク」の「イエクル」へのつかの間の回帰をただ示すばかりではない。ジェンダーという観点からこの場面の記述を見直すと、このヴィジョンが二人の男女の姿で構成されており、両者のあいだにユダヤ教の宗教儀礼に対する態度の開きがあることに目を向けないわけにはいかない。一家の長として君臨する夫に対して、妻はひたすら謙虚につき従うべし——ヴィジョンが物語るそんな故国での夫婦関係の在り方を、アメリカでもジェイクはそのまま引き継いで、妻ギトルに接しているのではないか。そうだとすれば現在の「ジェイク」のなかに、「イエクル」というもはや異質な過去の自分がわずかながら残されている、というジェイコブソン流の

8) Matthew Frye Jacobson, *Special Sorrows: The Diasporic Imagination of Irish, Polish, and Jewish Immigrants in the United States* (Berkeley: University of California Press, 2002) p.103.

見解は修正を余議なくされるだろう。むしろ「ジェイク」という自己を形成する際の必要不可欠な材料として、「イエクル」的な自己がしっかりと温存されている、と捉え直した方がよい。「男らしさ」を誇示することを通してジェイクが故国との紐帯を断ち切ろうとすることは前節で確認したが、そのような男性性の過剰な顕示こそが、実は彼を故国に強く繋ぎとめるものになっているという可能性。同化とジェンダーをめぐるこの逆説が、『イエクル』という小説の核にあることが見えてくる。

「イエクル」という古い自分から逃れるべく、主人公は「ジェイク」という新しい自分を作ろうとする。だが両者は断絶して存在しているのではなく、あくまでも連続性を保ち、古い自己は新しい自己を包摂させている。そのように考えて初めて、主人公が既にジェイクと名前を変えた段階での物語であるのに、小説のタイトルが『イエクル』とされていることの意味合いが十全に理解されてくる。よく知られるように、この題名はやや複雑なプロセスを経て定まっている。カーハンは当初この長編に *Yankel the Yankee* という題をつけ、出版を目的としてウィリアム・ディーン・ハウエルズに原稿を見せたのだが、ハウエルズはこのタイトルがあまりにも作為の過ぎるものとして難色を示し、*Yekl: A Tale of the New York Ghetto* という別案を出した。この新タイトルが結局採用されることになったのだが、それでも下層階級のユダヤ人しか登場しないこの小説には多くの出版社が拒否反応を示し、ようやく D. Appleton 社より上梓される運びとなるのに相当の時間がかかった。(ちなみにアプルトン社は、やはりニューヨークの下層生活を生々しく描いた Stephen Crane の小説 *Maggie: A Girl of the Street* を 1893 年に出版して、人々に衝撃を与えている。) その間に、しびれを切らしたカーハンはイディッシュ語でこの物語を翻訳し、独自のルートで発表したのだが、この別ヴァージョンでは最初の案に倣ってタイトルは *Yankel der Yankee* となっている。小説タイトルに掲げられる主人公の名前を「イエクル」とするか「ヤンケル」とするかで揺れがあるものの、これがアメリカ化した「ジェイク」でなく、ユダヤ人としての自己を表示する名前であるという一点を、カーハンは揺るがせにできなかった。<sup>9)</sup>

ただし同時に、主人公のアメリカでの名前である「ジェイク」(Jake)もまた、周到に考えられた命名であることに注意を向けておくべきである。なぜなら「ジェイク」は、旧約聖書に登場する「ヤコブ」(Jacob)の愛称であるからだ。<sup>10)</sup> ユダヤ民族の祖として位置づけられるこの人物は、物語がかなり進展した第7章でさり気なく言及されている。「未熟者」であるがゆえに夫に嫌われていると考え、泣き続けるギトルを、カヴァルスキー夫人が次のように言って励ますのである。“[...] And in the meantime stop crying. A husband hates

9) Cahan と Howells の交友、および *Yekl* 出版の経緯については、Jules Chametzky, *From the Ghetto: The Fiction of Abraham Cahan* (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1977) ch4. “Cultural Interaction: *Yekl* and Howells” を参照のこと (pp.57-74)。Howells はエッセイ “New York Low Life in Fiction” (1896 年) において、Stephen Crane の *Maggie* と Cahan の *Yekl* とを並べ、後者の人間観察の深さやユーモアの特質について称賛している。William Dean Howells, *Selected Literary Criticism, Volume II: 1886-1897*, (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1993) pp.274-78.

10) この点に関しては Wirth-Nesher も、*Call It English* において僅かながら触れている。p.39 参照。

a sniveller for a wife. You know the story of Jacob and Leah, as it stands written in the Holy Five Books, don't you? Her eyes became red with weeping, and Jacob, our father, did not care for her on that account. Do you understand?" (66) レアはヤコブの最初の妻であるが、泣きはらした目をしていることが逆に夫の不興を買ってしまう。不幸な結末を迎えるヤコブとレアの婚姻関係は、確かにジェイクとギトルという夫婦の関係とぴったりと重なり合う。夫は妻につらくあたって悲しみを与えるが、その泣き顔を見ることでますます苛立ちが募り、更に責めさいなむ。あるいは妻が相手を何とか喜ばせようとおもねる態度を取ればとるほど、夫は余計に苛立ちを募らせる(61)。そんな悪循環に陥った既婚男性のねじれた感情を、カーハンは容赦なく書き込んでいる。こうした夫婦関係の暗部の描写は、もちろんリアリズム文学の書き手としてのカーハンの手腕を示すものではある。だが、さりげなく挿入された旧約聖書への言及は、この男女の感情の軋みを宗教的なアレゴリーという異なった視座から眺めるようにと読み手を促してもいる。「イエクル」というユダヤ人としての自己を捨てて、アメリカ人として生まれ変わろうと目論見た主人公が採用した名前がユダヤ民族の長に通じるものであった、という強烈なアイロニーがかくして浮かび上がる。そして、主人公の「ヤコブ」としての相貌が最もはっきりと認められるのは、何よりもまず、共に家庭生活を営む女性との関係においてなのである。

“A Paterfamilias”, すなわち「家父長」と題された第5章は、このような家庭に君臨するユダヤの家長たるジェイクの姿が最も鮮明に描き込まれると共に、最も痛烈に笑いのめされる章として特筆に値する。ここでは新世界での家庭生活が始まって2週間後の夫婦の行動や心の動きが、まずギトルの視点から、そしてジェイクの視点からそれぞれ迎られるが、両者はやがて、息子ジョーイや下宿人となっているバーンシュタインらと共に夕食をしたための場面へと合流していく。ここでもジェイクは、英語が十分に話せない妻を、憶えのよい息子と比較しつつ質の悪い嘲弄的にする(47)。あるいはギトルが「未熟」(green)であることに苛立ちながらも、彼女が楽しみ事などに目もくれない貞淑で模範的な主婦であることが、せめてもの慰めになってくれていると——自分はダンス教室に通いつめていたこともそっちのけで——都合よく考えたりする(45)。ジェイクが自らの体裁を取り繕うため、ギトルのアメリカ化を願う一面があるのは先述した通りだが、実のところ、妻が完全に同化して完璧な「アメリカ人」になってしまうところまでは、彼は決して望んでいない。なぜなら、「家庭を司る長であり、有望なる息子の父親」“the head of a household and the father of a promising son” (45) たる自分の権威は、妻を従属的な位置に留めておくことによってこそ盤石のものとなるのだから。だがそこに突然、つきあっていた例の女性マミーが、めかしこんでジェイクの家庭に踏み込んでくる。以前あんたに貸してあげた25ドル、返してよ——垢抜けない姿をしたギトルを横目で値踏みしつつ、英語でジェイクに迫るマミー。これまでの自分の行いが妻に露見しないかと、しどろもどろで対応するジェイク。そんな修羅場のうちにジェイクの権威が失墜したことが読者の目に明らか

になったところで、この第5章は幕を下ろす。これ以降のジェイクは、もはや男ぶりのよい「ヤンキー」にも、家庭に君臨するユダヤの家父長にも成りきれない。二重の意味で「男らしさ」を発揮する力を奪われた彼は、宙ぶらりんのアンチヒーローとしての末路を辿らざるをえない。ギトルとの結婚生活によりやく終止符を打ち、マミーと再婚する成り行きになるものの、解放感にひたるどころか言い知れぬ後悔と不安に襲われてしまう車中のジェイクを描いて『イエクル』の物語は締めくくられる。

## 5. 溶けきれない移民たち

19-20世紀転換期に東欧・南欧から大量に新大陸に流れ込んだ移民たちが、「人種のるつぼ」のなかで溶かされて早い段階で主流のアメリカ人へと同化していった、という人口に膾炙した見解は、現在再検証のただなかにある。旧世界から来た移民たちの社会的上昇のプロセスが、例えばアフリカ系アメリカ人のそれよりも急速であったことは動かしがたい歴史的事実であろうが、主流社会への同化を促す力と共にそれに抗う力の強さに関しても、正当な評価が与えられつつあるのである。例えば前節で引き合いに出したマシュー・M. ジェイコブソンは、アメリカにやって来たアイルランド系、ポーランド系、そしてユダヤ系の移民たちがそれぞれに作り上げてきた「政治文化」(political culture)を素材にし、それを通して各エスニック集団が新天地アメリカにおいても母国との絆をいかに積極的に持ち続けたかを検証しようとしている。

これまで論じてきたように、主人公がアメリカ人に変身しようと試みることによって、逆にユダヤ性を露わにしてしまうという逆説を孕んだ『イエクル』は、世紀転換期アメリカの同化主義に対して皮肉な眼差しを投げかける小説である。この時期のエスニック集団に対する近年の修正主義的な見方を裏付けるのに格好の素材であるために、ジェイコブソンもこの小説を取り上げ、少ない紙数ながらも洞察力鋭く論じている。その結論として彼は、ユダヤ人のアメリカ主流文化への同化は「望ましくない」(undesirable)ばかりかそもそも「不可能」(impossible)なのだ、というカーハンの政治的立場を『イエクル』に読み取っている。<sup>11)</sup> これは誤読ではないにしても、カーハン作品の多層性をやや単純化しすぎた主張であるように私には思われる。この点を掘り下げて考えるためには、強烈に押し出される男性性というジェイコブソンが切り捨ててしまった側面から、小説が発信している双方向的なメッセージを割り出す必要がある。

まず、ユダヤ人はあくまでユダヤ人なのだ、という同一性を強調する視点が作品には確かに内在する一方で、民族の文化習慣、とりわけその中核になっている宗教にしっかりと根を張っている家父長制に対する批判も作品には盛り込まれていることを見落としてはならない。これは前節で確認したポイントである。旧世界における息苦しい男女の関係性を変えるか、そこから身を引き離さない限り、性別を問わずユダヤ人は真にユダヤ人らしい

11) Matthew Frye Jacobson, *Special Sorrows*. p.103.

生き方、ひいては人間らしい生き方ができない——これがジェイクとギトルの夫婦関係の描写から読み取れるカーハンの考えである。

一方、19世紀末においてこの家父長制は、ロシア・東欧のユダヤ人居住区のみならずアメリカ社会にも形を変えて存在していた。この連続性をカーハンがよく認識していたことを知るためには、前節で取り上げた第5章にいま一度立ち戻ってみるのがよい。息子のジョーイ(=ヨッセレ)が大きくなったら何になるか、という話が家庭の夕食時の話題にあがる。アメリカの大統領になるかな(“*I tell ye he is growing to be President 'Nited States*”), と下宿人のチャーリーが冗談めかして言うと、ジェイクはいきりたって怒鳴りつける。“*Greenhorn that you are! A President must be American born.*” (47) これは二重に皮肉な場面である。大統領になることに集約される合衆国の立身出世主義、言い換えると「ぼろから金持ちへ」“*rags-to-riches*”と称されていた社会的上昇のコースから自分たち移民は弾き出されていることを、「ヤンキー」を気取ってきたジェイク自身が認めてしまうというアイロニーはもちろんある。しかしそもそも、大統領云々といった話はジョーイが男の子であるからこそ持ち出されるのであって、子供が女の子であったなら、このような会話はなされていないはずである。世紀転換期アメリカの社会的上昇のコードがジェンダー化され、ユダヤ移民の女性がそこから二重に弾き出されていることへの隠れた皮肉もここには読み取れる。したがって、“*A Paterfamilias*”という章題において作者カーハンは、ユダヤの家父長制のみならずアメリカ合衆国の男性中心主義的な在り方も、ひそかな批判と揶揄のターゲットにしているのである。さかのぼって、怪しげな男らしさを振りまわす「ヤンキー」としてのジェイクを描く物語序盤の筆致がからかい気味になるのも、アメリカ流の男性性のあり方に、母国でのそれに通じる胡散臭いものをカーハンが感じ取っているからであろう。

以上のようにジェンダーという視座から眺め直してみるならば、移民たちがロシア・東欧に広がる伝統的なユダヤ人コミュニティの世界に単純に回帰することも、アメリカ社会の「るつぼ」のなかに消えていくことも拒否する、という『イェクル』の両義的なスタンスが浮かび上がってくる。そして、小説においてこの両立困難な課題を最もよく体現している人物が、既に触れたバーンシュタインという男性なのである。作品冒頭、作業場の労働者集団を描いた例の場面では彼が真っ先に登場し、一番後ろにジェイクが置かれていることで予示されるように、この二人は様々な点で対立的な存在である。ジェイクがユダヤ的な外見も文化習慣も捨て去り、ひたすらに「ヤンキー」になろうとするのに対して、髭をたくわえた学究肌のバーンシュタインはラビのような身なりを保ち、食事の前には手の清めと祈りを欠かすことがない(45-46)。しかし彼は、ユダヤ人としての自己にこだわり続けながらも、英語の本を読み学習を重ねることによってアメリカという異国での生活に適応していこうともしている。もちろん、ジェイクが辛辣にからかうように、バーンシュタインは英語を読むのは得意だが、話すことはからきし苦手という欠点がある(7)。実際、この作品のなかでバーンシュタインが英語を話す場面は全くなく、彼はイディッシュ語し

か話していない。だが『イェクル』の世界律においては、それが逆の効果をもたらす。イディッシュ語は、標準的な英語に翻訳されるのだ。そのために、奇妙な形で表記された英単語に満ちた話し言葉を操るジェイクよりも、バーンシュタインの方がずっとまともな「ことば」を話している、という印象が読み手には与えられるのである。

そして、アメリカ社会への参入の仕方をめぐるジェイクとバーンシュタインとの違いは、男性性の在り様をめぐる両者の隔たりとも密接に関連している。生真面目なバーンシュタインは女性とのつきあいが苦手であり、ユダヤの結婚相談所(shadchen)にこっそり通ったりしている。だから彼は、労働者の仲間たちのなかで次のように秘かな冗談の種になる。“His [=Bernstein] reserved manner, if not his superior education, held Bernstein’s shopmates at a respectful distance from him, and, as a rule, rendered him proof against their badinage, although behind his back they would indulge an occasional joke on his inferiority as a workman, and—while they are at it—on his dyspepsia, his books, and staid, methodical habits. (48) バーンシュタインの何がいけないのかを列挙する際、ダッシュ記号で挿入されている箇所が示すように、上品な語り手は言いよどんで消化不良(dyspepsia)云々と続けるのだが、要するにここで労働者たちは、バーンシュタインが性的不能だ、女を悦ばせる手練手管を知らない朴念仁だ、と陰口をたたいているのである。そんな彼は、不特定多数の女性と上手につきあい楽しませることのできるジェイクと好対照を成す。

だがその代わりバーンシュタインは、ジェイクのように女性に対して「家父長」としてのいかつい顔を見せることもない。だからこそ作者カーハンは物語の最後で、ジェイクと離婚したギトルの新たなパートナーとしてこの男性をほめめかすのである(88-89)。そこに至るまでにはいくつか伏線が張られている。一つだけ挙げれば物語の中盤で、ユダヤ的な風貌が抜けきれないギトルがジェイクに嫌悪され、意気消沈する姿を目にしたバーンシュタインが、あなたはとても綺麗なご婦人ですよと話しかけ、慰める場面がある(54)。彼がギトルに対して控え目な好意を示すこのくだりでは、ユダヤ性を十分に残したバーンシュタインの方が、アメリカ人らしくありたいと「男」を振りまわすジェイクよりも、すぐ後でカヴァルスキー夫人言うところの「レディー・ファースト」(“*ladas foist*” 56)の精神に則っている点で、かえってアメリカ人らしくなっているようにも見える。

アフリカ系知識人W.E.B. Du Boisの有名な言葉を借用するならば、ユダヤ人であることと、アメリカ人であることとの齟齬から生じる「二重意識」(double-consciousness)をあえて自覚しつつ生きていくことを選択し、それに成功しているようであるのがバーンシュタインという人物だと言える。ほぼ20年後に書かれることになる大作『デイヴィッド・レヴィンスキーの向上』は、合衆国の資本主義と競争原理を信奉して社会的に上昇していく主人公が、心を許し合える女性の配偶者を遂に見つけることなく老年を迎え、ありえたかもしれないもう一人の自分に思いを馳せるところで締めくくられるが、カーハンの英語作家としての最初期に書かれた『イェクル』にこそ、このもう一人のデイヴィッドの姿がお

ぼろにはあっても書き込まれているのを見落としてはならない。<sup>12)</sup> ラビであるバーンシュタインが、正規の教育を受けず離婚という傷もついたギトルと結ばれるという可能性は、カヴァルスキー夫人も結末近くで指摘するように、古い因習の残るロシアではありえず、新天地のアメリカにおいて初めて成立する(88)。この男女の組み合わせを通して作者は、ユダヤ人がアメリカ人になることが「望ましい」し「可能」でもあるような条件を探ろうとしている。主人公ジェイクの哀れな末路が、ユダヤ人はどこに行ってもユダヤ人のままであり続けるという命題を反面教師のような形で提示するとすれば、それと並べられたもうひとつの結末を通してカーハンは、古くから馴染んできた世界から身を引き離されるという移民体験によってこそ、ユダヤ人はよりユダヤ人らしく、そしてより人間らしく生きることもできるのだという展望を示したのである。

---

12) 若いユダヤ人夫妻が貧しさをしのぐために未婚男性を下宿人にするが、この男が夫人と性的な関係を取り結ぶようになる、という趣向をカーハンはしばしば使う。これは『イェクル』のバーンシュタインとギトルを起点とし、短編“Circumstances”(初出は1897年)のDalskyとTatyanaを経由して、『デイヴィッド・レヴィンスキーの向上』におけるDavidとDoraとの関係に至る。だがこの系譜のなかでは、描かれる男女関係がよりスキャンダラスな性質を帯びていくことには注意が必要である。バーンシュタインとデイヴィッドが連続性を持ちながらも、本質的にそれぞれ異なる人物像であると言えるひとつの証左がここにある。